

～新渡戸記念の～

## 『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第40回『心の処方箋 ～ 悩みがスッキリ軽くなる ～』

『吉田富三記念 がん哲学外来 in 福島県立医大臨床腫瘍センター』での面談で、ご夫婦が、廣濟堂の本『がんに効く 心の処方箋 1問1答 ～ 悩みがスッキリ軽くなる ～』（2017年1月5日 廣濟堂出版）を持参されました。感動した。本の「はじめに」には、「これまで多くの患者さんや ご家族からうかがってきた 切実な悩みには、共通していることが 多くあります。—— 現在 病気の悩みをかかえていらっしゃる方は、この本の Q&A の中に、今のご自分の心の状態を 改善できるメッセージやアドバイスが きっと見つかることと思います。」と紹介されている。 各章の抜粋は、下記の如くのものである。

#### 第1章 自分が がんの診断を受けたとき

Q1: がんの診断を受け、パニックになってしまった。

Q6: 自分の病気によって 家族に迷惑をかけることがつらい。

Q21: 社会から切り離された気持ち、疎外感を感じる。

#### 第2章 家族が がんになったとき

Q1: がんの診断を受けた家族に どう接したらいいか？

Q8: 「死にたい」「もうだめだ」など と言う患者を どうなだめたらよいか？

#### 第3章 友人、知人として できること

Q3: 友人として どんな話題が 患者に喜ばれるのか？

Q5: お見舞いに行くタイミングは どうはかったらよいか？

Q7: 末期の患者さんに 友人として できることは何か？

福島県立医大 臨床腫瘍センターのスタッフの方から『奥様のご心労も多いのですが、「憧れの先生に お会いできたので、これから頑張れる」とお帰りになりました。心にも 大きな贈りものを いただいたと存じます。』との心優しいメールを頂いた。 涙無くして語れない！ 今回の『吉田富三記念 がん哲学外来 in 福島県立医大臨床腫瘍センター』は、「自分を見出すチャンス」の学びの時となった。 筆者の小さな村（鶉峠）での「青虫が 蝶になる」日々の観察が、鮮明に蘇って来た。